

「米の最高機密」終戦間際、中国武官が打電

「産主義者に降伏」

終戦間際の昭和20(1945)年6月、スイスのベルン駐在の中国国民政府の陸軍武官が米国からの最高機密情報として、「日本政府が共産主義者たちに降伏している」と重慶に機密電報で報告していたことがロンドンの英国立公文書館所蔵の最高機密文書ULTRAで明らかになった。戦局が厳しい状況に追いこまれる中、日本がソ連に接近して和平仲介を進めたのは、ソ連およびコミンテルン国際共産主義が日本中枢に浸透していたためとの説を補強するものとして論議を呼びそった。(岡部伸)

＝3面に「共産国家構想」

英所蔵文書で判明

機密電報は1945年6月22日付で中国国民政府のベルン駐在尹ツン(中国名・齋校)陸軍武官が重慶の参謀本部に伝えた。英国のブレッチリー・パーク(政府暗号学校)が傍受、解読し、ULTRAにまとめ、公文書館に保管されていた。英国は交戦国だったドイツ、日本だけでなく、中国など同盟国を含め三十数カ国の電報を傍受、解読していた。

浸透説を補強

電報の内容は「米国から得た最高機密情報」として、「国家を救うため、日本政府の重要メンバーの多くが日本の共産主義者たちに完全に降伏(魂を明け渡)してい

る」と政権中枢が「コミンテルン」に汚染されていることを指摘。そのうえで、「あらゆる分野で行動することを認められている彼ら(共産主義者たち)は、全ての他国の共産党と連携しながら、モスクワ(ソ連)に助けを求めている」とした。

そして「日本人は、皇室の維持だけを条件に、完全に共産主義者たちに取り仕切られた日本政府をソ連が助けてくれるはずだと(米英との和平工作を)提案している」と解説している。

敗色が濃くなった日本では同年5月のドイツ降伏を契機に、ソ連を仲介とする和平案が検討され、電報が打たれた6月には、鈴木貫太郎内閣による最高戦争指導会議で国策として正式に決まった。

齋校武官は、この電報のほかにも同年2月のヤルタ会談で、ソ連が対日参戦を正式に決めたこと打電したほか、5月からベルンで繰り返された米国との直接和平工作の動きを察知して逐一報告するなど、日本の動静を詳細に把握していた。

終戦へ共産国家構想

陸軍中枢「天皇制両立できる」

ベルン駐在中国国民政府の武官が米国からの最重要情報として「日本政府が共産主義者たちに降伏している」と打電した背景には何があるのか。陸軍中枢にはソ連に接近し、天皇制存続を条件に戦後、ソ連や中国共産党と同盟を結び、共産主義国家の創設を目指す「終戦構想」があった。



鈴木貴太郎首相（肩書は当時、写真上）は昭和20年6月22日の最高戦争指導会議で、ソ連

仲介の和平案を国策として決めた際、「（共産党書記長の）スターリンは西郷隆盛に似ているような気がする」と、スターリンを評価する発言をした。

この発言に影響を与えたとみられるのが、首相秘書官を務めた松谷誠・陸軍大佐が、4月に国家再建策として作成した「終戦処理案」だ。松谷氏は回顧録「大東亜戦収拾の

昭和20(1945)年の主な出来事

2月4~11日	クミア半島ヤルタ会談でソ連対日参戦の密約
3月10日	東京大空襲
4月1日~6月23日	沖縄戦
4月 5日	ソ連、日ソ中立条約不延長を通告
7日	鈴木貴太郎内閣誕生
12日	米ルーズベルト大統領死去
5月 7日	ドイツ無条件降伏
11~14日	最高戦争指導会議で対ソ交渉開始を決定

「真相」で「スターリンは人情の機微があり、日本の国体を破壊しようとは考えられない」「ソ連の民族政策は寛容。国体と共産主義は相容れざるものとは考えない」などと、日本が共産化しても天皇制は維持できるとの見方を示していた。

さらに「戦後日本の経済形態は表面上不可避免的に社会主義的方向を辿り、この点からもソ連に接近は可能。米国の民主主義よりソ連流人民政府組織の方が復興できる」として、戦後はソ連流の共産主義国家を目指すべきだとしている。同年4月に陸軍参謀本部戦争指導班長、種村佐孝大佐がまとめた終戦工作の原案「今後の対ソ施策に対する意見」でも、①米国ではなくソ連主

6月22日	最高戦争指導会議でソ連仲介和平工作が正式決定
7月26日	日本軍の無条件降伏求めるポツダム宣言
8月 6日	米広島に原爆投下
9日	ソ連対日参戦 米長崎に原爆投下
14日	天皇聖断でポツダム宣言受諾、終戦の詔勅
15日	天皇が玉音放送で終戦の詔勅朗読
18日	ソ連千島列島に侵攻
9月 2日	降伏文書に調印、太平洋戦争終結
5日	ソ連北方四島占拠完了

両立できる」



衛文鷹元首相「同下」は20年2月、「国体護持にもつとも憂うべき共産革命に急速に進行し

つつあり、共産分子は国体（天皇制）と共産主義の両立論で少壮軍人をひきまわらうとしている」と上奏文で天皇に警告した。

また、真珠湾攻撃目前の16年10月、ソ連のスパイ、リヒャルト・ゾルゲの協力者として逮捕された尾崎秀実は「われわれの目標は（コミンテルンの最終目標である全世界での共産主義革命の遂行）で、狭義には「ソ連を日本帝国主義から守ること」と供述している。

岸信介元首相は、25年に出版された三田村武夫著「戦争と共産主義」序文で「近衛、東条英機の両首相をはじめ、大東亜戦争を指導した我々は、スターリンと尾崎に踊らされた操り人形だった」と振り返っている。